

投稿論文

第二世代の性の管理をめぐる 母娘間の交渉 ——フィリピン系移民を事例として

三浦 綾希子 中京大学准教授

キーワード：性の管理，準拠集団，ネットワーク

本稿ではフィリピン系移民の母娘を対象に，第二世代の性の管理をめぐるどのような交渉が行われるのかを検討する。頻繁な電話による居所の確認や服装や行動への干渉によって，母親たちは第二世代である娘たちの性を厳しく管理するが，その背景には1) フィリピン社会の性規範，2) 親戚やエスニック・コミュニティにおける早期妊娠，3) 在日フィリピン人女性に向けられるステレオタイプがあった。特に重要なのは，日本社会に根付いているフィリピン人＝性的に奔放というイメージを払拭するため，またはそうしたイメージから娘たちを遠ざけるために娘たちの性を管理しているという点である。

このような母親からの性の管理に対する娘たちの対応は準拠集団とする仲間集団とフィリピン文化の継承のあり方によって異なっていた。ただし，準拠集団となる仲間集団は複数存在する点に留意が必要である。対象者となった娘たち同士で作られる幼なじみ集団もまた彼女たちの準拠集団となる。また，母親たちも含んだ世代間閉鎖性のあるネットワークが相互監視を促し，娘たちに性規範を遵守させたり，母親以外のメンバーが仲介役となって母娘間の緊張関係を緩和する様相も見られた。一方の準拠集団で共有される価値規範をもう一方の準拠集団が相対化することもあり，準拠集団を複合的に捉える視点を持つことの重要性が示唆される。

1 問題の所在

1990年代以降急増した移民の子どもに関しては，学校適応や言語習得，不就学，進路形成についてなど，これまで多くの研究蓄積が積み重ねられてきた（たとえば，志水・清水，2001；宮島・太田，2005；佐久間，2006）。近年では，かれらが青年期，壮年期を迎えたことを踏まえて，大学進学や就労に関する研究，エスニック・コミュニティにおけるかれらの自立的な活動に関する研究も行われ始めている（児島，2008；矢元，2016；ダアノイ，2017；津田，2017）。一方，日本の移民第二世代研究においては，ジェンダーの視点が欠落していることが指摘されている（額賀，2016；藤浪，2017）。第一世代に関しては，エンターテイナーとして来日したフィリピン人女性を主な対象として，女性移民が

おかれた搾取構造や彼女たちに付与されるステレオタイプに関する研究が多く積み重ねられてきた(たとえば、伊藤, 1992; Ballescás, 1992=1994; 笠間, 2002)。しかしながら、第二世代については最近になってようやく進路形成や学業達成に関してジェンダーの視点から分析した研究が行われつつあるものの(額賀, 2016; 藤浪, 2017; 坪田, 2018), まだ端緒についたばかりであり、その蓄積は多いとはいえない。特に、移民第二世代女性の性の管理については、エスニック集団の名誉や文化的境界の維持という論点と関わって、多くの移民研究で重要なテーマの一つとされてきたが、日本の移民第二世代研究においては、このテーマを扱った研究は管見の限り見当たらない。そこで本稿では、日本に暮らすフィリピン系移民を対象に、第二世代の性の管理をめぐる母娘間でどのような交渉が行われるのかを検討し、第二世代の女性たちが抱える課題について明らかにしたい。移民政策が不在の日本において、今後あるべき政策の方向性を示すためには、現状の移民の生活世界をつぶさに明らかにすることが重要である(高谷ほか, 2019)。移民の若者の生活世界がジェンダーによってどのように異なっているのかを明らかにすることは、若者の統合政策を考える上でも必要な作業であると考えている。

2 先行研究の検討と課題の設定

アメリカの移民研究では、第二世代の女性たちが親から男女交際等、性に関わる行動を厳しく管理されることがしばしば指摘されてきた(Das Gupta, 1997; Toro-Morn and Alicea, 2003; Espiritu, 2003)。親たちは娘たちがホスト社会に同化する中で性的に逸脱しないようその行動を監視するが、それは移民集団が自分たちの文化を守るために行う行為でもあるという。移民第二世代の女性たちが伝統的な性規範を遵守し、性的に純潔であることはその文化の正統性や道徳的優位性を示すものとなる。アメリカ社会の中で階層的に劣位におかれ、差別にさらされている移民の親たちは娘たちの行動を管理し、伝統的な性規範を遵守させることによって文化の正統性を維持し、自分たちがホスト社会のマジョリティよりも道徳的に優れていることを顕示しようとするのである(Espiritu, 2003)。さらに、第二世代の女性たちが性的に逸脱することは、エスニック・コミュニティの名誉を傷つけることになるため、親だけでなくコミュニティからも彼女たちには監視の目が向けられる(Sheba, 2005=2011)。コミュニティにおける相互監視は、コミュニティ内で重視される規範の遵守を促し(Zhou and Bankston III, 1998)、その結果、伝統的な性規範は維持されていくという。ここで注目したいのは、第二世代の女性たちが親から厳しくその性を管理されるのに対して、男性たちが性に関わる行動を管理されることはほとんどないということである。特に本論文でも対象となるフィリピン系の場合は、女性のほうが男性よりも親に性を管理、統制されやすい(Wolf, 2002)。

無論、このような親からの管理、統制に対して娘たちはただ従うだけではない。親に隠れてデートをしたり、親に反抗的な態度をとることによって、親の管理に抗おうとする場合もある(Espiritu, 2003)。また、経済的に自立して親元から離れたり、親の望む以外の相手と結婚したりすることで親の管理に抵抗しようとする者もいる(Das Gupta, 1997)。一方で、親の管理から逃れるべく、ギャングに入ったり、親の管理のもとで自尊心を損ない、自殺したりする者もいる。特にアメリカで

は、フィリピン系二世代の女性の自殺率が高いことが明らかになっている (Wolf, 2002 ; Espiritu, 2003)。自分のことよりも家族のことを重視する「家族中心主義^{*1}」と呼ばれる規範はフィリピン文化の特徴の一つとされているが (Espiritu, 2003 ; Wolf, 2002), この規範を守る役割期待は女性たちにより向けられている。この規範のもと、フィリピン系二世代の女性たちは家族の名誉のために学業達成をすることや道徳的に優れていることが求められるが、こうしたプレッシャーに耐えきれず、自殺する者も多いのだという。

それでは、なぜこのように親の性の管理に対する娘の対応に違いが現れるのだろうか。本稿では、準拠集団となる仲間集団との関わりと二世代の文化継承のあり方に注目したい。移民二世代のホスト社会や学校への適応を考える際に重要視されるものの一つとして仲間集団があるが、特に思春期以降は友人関係の有様が移民二世代のエスニックアイデンティティや学業達成に大きな影響を与えるといわれる (Zhou and Bankston III, 2016)。すなわち、仲間集団は、かれらの行動や意識に影響を及ぼす準拠集団であるといえ、性に関する認識や行動にも影響を与えることが考えられる。また、親たちは出身国社会で共有されている規範を移住先の社会の規範よりも優れていると捉え、娘たちにもその規範を身につけさせようとして性の管理を行うが (Espiritu, 2003), これは二世代に出身国の文化を継承させるための行為でもある。性規範のみならず、様々な道徳規範は文化の一部を構成する。親の文化をどの程度継承しているかによって、親の性の管理に対する理解度も異なり、対応のあり方にも違いが出るのが考えられる。

以上を踏まえ、本稿では日本在住のフィリピン系の母娘を対象に、性の管理についてどのような交渉が行われているのか、その内実を仲間集団の関わりと文化継承のあり方に着目しながら明らかにする。分析にあたっては、先行研究として取り上げたアメリカの事例との違いに留意する必要がある。日本に居住するフィリピン系の特徴として女性の数が圧倒的に多いこと、そして彼女たちと日本人男性との国際結婚が多いことが挙げられる。そのため、日本在住のフィリピン系親子の場合、母親がフィリピン人で父親が日本人というパターンが多数を占める。前述した先行研究で取り上げられていたアメリカの事例は両親ともフィリピン人であったが、日本では母親が一人でフィリピンの文化継承を行うことが多い。この社会背景の違いには留意が必要である。さらに、母親が一人でフィリピンの文化継承を行うことが多いゆえに、日本で文化継承を行うにあたっては、エスニック・コミュニティやネットワークの存在がより重要になることも指摘されている (三浦, 2015 ; 額賀, 2016)。ここからは、母娘間の関わりのみならず、エスニック・コミュニティやネットワークの影響も含めて事例を検討することの重要性が示唆される。このような在日フィリピン人の特徴を踏まえた上で本論文では分析を行う。具体的には、下記のリサーチクエスションを設定する。

- ①フィリピン人の母親たちは娘の行動をどのように管理するのか。その背景には何があるのか。
- ②二世代の娘たちは母親の管理に対してどのような対応をとるのか。その対応の仕方の違いには何が要因として関わってくるのか。

表1 対象者のプロフィール詳細

		仮名	年齢	職業	国籍 (日本での在留資格)	来日経緯	その他同居家族
A家	母	エイミー	48	清掃業	日本(帰化)	家事労働者	父, 祖母(父の母親)
	長女	凜	19	介護士	日本		
	次女	志穂	18	専門学校生	日本		
B家	母	ケリー	43	介護士	フィリピン(永住)	家事労働者	父, 弟(6歳), 祖母(父の母親)
	長女	陽菜	19	大学生	日本		
C家	母	ニコール	53	家事労働者	フィリピン(永住)	国際結婚	父, 長兄(25歳), 長姉(24歳), 次姉(21歳), 次兄(20歳), 弟(14歳)
	三女	美波	19	フリーター	日本		

出典：筆者作成

3 調査対象

対象となるのは在日フィリピン人の母親3名とその娘たち4名である。母親たちの滞日期間は20～30年である。いずれもエンターテイナーとしての来日ではなく、家事労働者^{*2}として来日した者が2名、結婚を機に来日した者が1名である。娘たちは皆、母フィリピン人、父日本人の日比国際結婚家庭で育ち、年齢は20歳前後である。日本生まれ、日本育ちであり、フィリピンに長期滞在した経験はない。対象者のプロフィールの詳細は表1に記した通りである。名前は全て仮名である。対象者たちは互いの家まで徒歩10分程度の場所に住む。娘たちが未就学児のときに母親たちが公園や保育園で出会ったのをきっかけに、母娘ともに現在に至るまで緊密な関係を維持している。また、母親たちはフィリピン人が多く集うエスニック教会^{*3}に通っており、教会を中心としたエスニック・コミュニティに属している。なお、本調査は首都圏近郊で実施した。

筆者は2010年より対象者たちへのインタビュー調査や、かれらが通う学習支援室、エスニック教会での参与観察を続けてきた。本研究はこうした継続的調査の延長上にある。今回の対象となった者たち以外のフィリピン系移民にも筆者はインタビュー調査を行っているが、対象者たちが強固なネットワークを維持し、かつ母からの性の管理に対する娘たちの対応にバリエーションが見られたこれらの事例が本稿の課題に照らし合わせて最適であると判断した。在日フィリピン人女性の多くは、エンターテイナーとして来日しており、家事労働者として来日した者の数は少ない。その意味で本稿の母親たちの来日経緯は特殊であるといえる。しかしながら、先行研究ではエンターテイナー出身の母親たちも娘に対して貞淑性を求めることが明らかになっており(額賀, 2016)、職業や来日経緯にかかわらず母親たちが娘たちの性を管理する可能性が示唆される。サンプル数が少ないという限界はあるが、エンターテイナー出身の母親との比較検討を今後視野に入れつつ、本稿ではフィリピン系母娘が性の管理をめぐるどのような交渉を行うのか、その一端を描き出したい。

本稿では主に2018年に行った半構造化インタビューで得られたデータを用いるが、補足的にそれ以前のフィールドワークで得られたデータも用いることとする。インタビューはいずれも対象者の許可をとり、録音している。インタビューやフィールドノーツの引用箇所はゴシック体で表記し、

引用者による補足は（ ）で、省略箇所は……で表記した。ほとんどのインタビューは日本語で行なっているが、英語の部分は斜体で示し、翻訳は筆者が行なった。

4 母親たちによる娘の性の管理

(1) 性の管理のあり方：頻繁な電話と服装や行動への干渉

それではまず、母親たちが娘の性をどのように管理するのか見ていこう。娘たちが口を揃えて主張したのは外出時に母親から頻繁に電話がかかってくるということである。友人と遊びに出かけるときなど、帰宅が遅くなっているわけでもないのに電話でどこにいるのか確認されるという。

志穂：(友達と遊んで) 携帯を見なかったら、ずっともう「志穂どこ？志穂志穂」(ってLINE 来てて)、電話めっちゃ、ばあって来て、「え？」って思って。

——それは無視するとどうなるの？

志穂：もうずっと電話かかってきて。「どこにいるの？早く家帰ってきて」みたいな。で、家帰ったら、めっちゃ、ばばばって言われる。……でも、志穂、遊ぶ前には、誰とどこに遊び行ってくるみたいなのは言ってんの。 【志穂／2018年3月21日インタビュー】

誰とどこに遊びに出かけるかを事前に言ってあるにもかかわらず、何度も電話がかかってくることに志穂は不満をもちます。毎回母親からの電話にでていたら、きりがなく、友達との時間が台無しにされるため、家に帰ってから色々言われるのを覚悟でわざと電話を無視することもあるという。同様に姉の凜も友人と遊びにでかけているときに母親から電話で居所を尋ねられ、場所を言うと「今からママ、そこに行くから」と言われ、本当にやってきたことがあると半ば呆れ気味に語った。こうした電話での居所の確認は、行動範囲と交友関係が広くなり、親が娘たちの行動を把握しにくくなった高校以降に始まったものだという。フィリピン人の母を持つ娘たち4名は、皆同様の経験をしているが、彼女たちの日本人の友人は、親から頻繁に電話がかかってくるということはなく、日本人の親とフィリピン人の親では対応が異なると彼女たちは話す。

普通に大学の友達とか、高校の頃の友達とか中学の頃の友達と遊びに行くときも「今から帰る」とか(電話したり)、(親から)電話かかってきたりするの、いつもうちだけだから。

【陽菜／2018年3月21日インタビュー】

「今どこにいの？」とか、(自分だけ)そういうのがあった。そのときに、やっぱ日本人の人ってあんま縛りが無いなって思ったの。 【美波／2018年3月21日インタビュー】

当初はこれが当たり前のことなのかと思っていた者もいたが、日本人の友人の親との比較によって、彼女たちは自分たちがとかく厳しく干渉されていることを認識していく。一方、このような娘

たちの主張に対し、母親たちは「電話（するの）はフィリピン人みんなそうだよ」（エイミー）と言い、「心配だから当たり前」と述べる。筆者は母親たちが属しているエスニック教会で継続的に調査を行っており、今回対象となった3名以外のフィリピン人女性にもインタビューを行っているが、その他の親たちも同様に子どもの居所を確認するために頻繁に電話をかけると話していた^{*4}。母親たちによれば、電話による居所の確認は男女関係なく行われると言うが、娘に対しては特に頻繁に行われるという。

また、服装や行動への干渉も娘たちの性を管理する手段として用いられる。露出の多い服装や派手な化粧は母親たちの期待する性規範から逸脱しており、望ましくない格好とされる。「肌出し過ぎとかは、『それビッチ（bitch）だよ』って言われる」と凜は述べ、高校時代に赤いリップを塗っただけで「軽い女に見られる」と母親に注意された経験を話してくれた。さらに、飲酒や男女交際については特に厳しく干渉される。飲酒は女性としてふさわしくない行動であるとされ、男女交際は成人するまで禁止されてきたと娘たちは述べる。異性と外出することも好ましく思われず、凜は家族ぐるみで付き合いがあるフィリピン系の男の子と映画を見に行っただけで、長時間正座をさせられ、説教されたことがあったという。

（酔っ払うのは）「女の子として恥ずかしいよ」って言われる。……「付き合っちゃ駄目」みたいなのは言われてた……ママ、男だめなの。男と遊ぶのだめなの。

【凜／2018年3月21日インタビュー】

（男女交際は）「絶対駄目」って言われる。だから、一度も（親に恋愛のことを）話したことない。……20歳までだめって。

【美波／2018年3月21日インタビュー】

ただし、男女交際に関しては母親たちの中でも意見が分かれる。ケリーは「（男女交際を）隠すのは嫌だ。オープンにして。好きな人できた。あ、じゃあ見せて。必ずおうちにつれてきて」と言い、親に紹介すれば男女交際も構わないと述べる。家に連れてきてどんな相手かをチェックし、好ましくない相手だった場合は娘に再考を促すという。交際相手ができた場合は親に紹介すべきという意見については、エイミーやニコールも同意している。親に隠れて交際するのではなく、きちんと親に挨拶できるような人と交際してほしいと母親たちは話す。こうした対応は、男女交際を全面的に禁止するよりは寛大であるように思えるが、交際相手を把握することによって間接的に娘の行動や性を管理下に置こうとしているとも捉えられる。

（2）母親たちが娘の性の管理を行う背景

それでは、なぜ母親たちはこのように娘の性を管理するのだろうか。その背景には大きく分けて3つの理由がある。第一に、フィリピン社会における性規範を母親たちが参照しているためである。カトリック国家であるフィリピンでは、性に対して厳格な意識が強く、男女交際には厳しい目線が注がれるという。特に女性は結婚するまで純潔を守ることが期待される（Espiritu, 2003；額賀, 2016）。

例えば、ケリーは「フィリピンはね。映画館ね、男と女入るとだめ、だめっていうか、おかしいでしょ。つきあってる」と述べる。母親たちは3名とも敬虔なキリスト教徒であり、娘たちにもキリスト教徒として恥ずかしくない行動をとって欲しいと話す。無論、フィリピン社会においてもこうした厳格な性規範が遵守されているわけでは決してない。母親たちはそれも承知の上で、フィリピンではこれが当たり前のだと娘たちに言い聞かせ、フィリピンで重視される性規範を守らせようとする。移民は母国と受け入れ国の社会や文化を比較する認識枠組みを持つが（Guarnizo, 1997；額賀, 2013）、母親たちは自分たちが育ったフィリピンの性規範を日本のそれよりも望ましいと捉え、フィリピンで共有されている性規範をもとに、娘たちの性を管理しようとするのである。

第二に、エスニック・コミュニティや親戚における早期妊娠が母親たちの意識に影響を与えている。日本、フィリピン両方の親戚や日本のフィリピンコミュニティの中に未成年で妊娠し、学業離脱をした者が数名おり、それを知っている母親たちは自分の娘たちには同様の経験はさせたくないと、娘の性を厳しく管理するのである。

ケリー：いいの。セックスしてもいいの。しょうがないの。でも、一番考えて（ほしいの）は、妊娠。大変だよ。

エイミー：あともう終わりだね。人生。遊びも行かれないし。

ケリー：遊べない。お母さんになる。

【2018年3月21日インタビュー】

特にエイミーは娘たちが中学の時から月経を毎月チェックし、妊娠をしていないか気にかけており、娘たちの月経が遅れた際には妊娠検査薬を購入したこともあったという。エイミーのこうした行き過ぎとも思える性の管理に対して二人の娘たちは反撥するが、夫の親戚が未成年で妊娠し、それを親に隠していたことから、娘たちが早期妊娠をしないよう厳しく管理するのだと彼女は述べる。

（親戚の娘が妊娠したことを）隠してたの。お父さん、お母さん分かってないの。知らなかったの。それでもう生まれるの。……だからそれが頭に入ってる。お母さんなんでわからないの？ 生理でみればいいじゃん。それから（娘の生理を）チェックしたの。

【エイミー／2018年3月21日インタビュー】

身近な親戚やコミュニティにおける早期妊娠の事例が母親たちの性の管理に影響を与えていることが分かる。また、親戚やエスニック・コミュニティ内における家族の名誉の保持ということも関わっている。特にエスニック・コミュニティにおいては相互監視が行われるが（Zhou and Bankston III, 1998）、第二世代の女性の早期妊娠など、性に関するゴシップはエスニック・コミュニティの間ですぐさま共有される。そしてそれは家族の名誉を傷つけることにもなりうる（Espiritu, 2003）。実際、母親たちが属しているエスニック・コミュニティでもそうした噂話は瞬く間に共有されていた。特に対象者たちが属しているのは、エスニック教会を中心としたコミュニティであるため、キリスト教の教えに反するようなことには批判的な目が向けられる^{*5}。仮に娘たちが未成年で妊娠すると

ということがあった場合、娘には逸脱者というレッテルが貼られ、母親たち自身もコミュニティに参加しづらくなる可能性は大いにある。そうならないよう、母親たちは娘の性を厳しく管理し、早期妊娠しないよう監視の目を光らせるのである。

第三に在日フィリピン人女性に付与されるステレオタイプへの抵抗がある。多くのフィリピン人女性がエンターテイナーとして性風俗産業に従事していたことから、「フィリピン人女性＝性的に奔放」というステレオタイプが日本社会に根強くあり、それが偏見の色を帯びて人々の間に浸透している（笠間，2002）。既述の通り、対象者の母親たちはエンターテイナーとしての来日ではないが、このステレオタイプは同じフィリピン人女性である彼女たちにも向けられる。それに対して彼女たちは戸惑い、自分たちはキリスト教徒であるがゆえに、エンターテイナーのような仕事には就けなと主張し、エンターテイナーとの違いを強調することでそのまなざしから逃れようとする。

私たちはクリスチャンだから、タバコも吸わないし、お酒も飲まないし、クラブで働くこともできない。……六本木で酔っ払ってふらふら～ってするようなことは娘たちにはしてほしくない。

【エイミー／2010年3月25日インタビュー】

母親たちはエンターテイナーの仕事は、キリスト教の教えに反しているから好ましくないと考えており、娘たちにクラブで働くフィリピン人女性のようにはなって欲しくないと語る。母親たちが娘たちの服装や行動などに干渉するのは、エンターテイナーとして働くフィリピン人女性たちとの差異化を図るためであり、それによってフィリピン人女性に向けられるステレオタイプから娘たちを守ろうとしているともいえる。この点は、額賀（2016）でも指摘されており、元エンターテイナーの母親たちの中にも「貞淑な女性性」を重んじ、他のフィリピン人エンターテイナーとの差異化を図りながら、日本社会のステレオタイプに抗う姿勢を娘たちに見せる者がいるという。母親たちが娘たちの性を管理するのは、在日フィリピン人女性に対するステレオタイプが娘たちに向けられないようにするための1つの戦術であるともいえる。

5 娘たちの対応

以上のような母親たちの性の管理に対して、娘たちはどのように対応するのだろうか。以下では、娘たち4名の対応の仕方について彼女たちの行動に影響を与える仲間集団の違いとフィリピン文化の継承の違いに注目して分析を行うこととする。親の文化を子どもたちがどの程度継承するかについては、いくつかのパターンがあることが日本のフィリピン系母娘を対象とした研究では指摘されている（額賀，2016）。親の文化を必ずしも子どもたちは全面的に継承するわけではなく、個々人の判断で選択的に継承したり、包括的に継承したりするという。ここではフィリピン社会で共有され、重視される規範や振る舞いをフィリピン文化と呼ぶことにする。

(1) 陽菜の事例

陽菜は娘たち4名の中で最も学業成績が良く、唯一の大学進学者である。幼い頃から品行方正で、大学生になった現在でも門限はしっかり守り、夜遊びをすることもない。一緒に遊ぶ友達は高校や大学の日本人の友達で、陽菜と同様に親に反抗したりする子は少ないという。中学、高校ともにフィリピン人やフィリピンハーフの子は周りにはおらず、大学には何人かフィリピンハーフの子がいるというが、気の合う友人は皆日本人であるようだ。友達と出かけるのは、カフェやショッピングセンターであり、クラブについては「怖い。……うるさそうだし。……勝手に悪いイメージしかない」と述べる。母親であるケリーとの関係は良好で、母親から頻繁に電話がかかってきたりすることに対しても理解を示している。

陽菜：(電話は) 心配だから、すごい、自分の子どもの場所を常に知っておきたい。

——別に嫌だとか思わない？

陽菜：うん。もう慣れちゃった。

(中略)

——それは(=頻繁に電話するのは) フィリピンの文化なんだっていう認識もあった？

陽菜：うん、大体フィリピン人ってそうかなとは思ってた。

【2018年3月21日インタビュー】

陽菜は家族で頻繁にフィリピンを訪れており、フィリピン人の温かさや家族のつながりの強さに好感を抱いている。フィリピン社会で共有される性規範についてもフィリピンに滞在する中で学んできており、何が望ましく何が望ましくないとされているのか、理解している。そのため、フィリピン人の母親たちが頻繁に電話をかけるのは、子どもが心配だからであり、それは自分だけではないことをよく分かっている。娘たち4名は皆、フィリピンに愛着を持っているが、特に陽菜の場合はその程度が強いといえる。歳の離れた弟が生まれるまで一人っ子であった期間が長かったことから母親との関係が他の3名よりも密着的であり、フィリピン文化に慣れ親しんでいることも関係しているだろう。

(2) 美波の事例

美波が準拠集団としているのはフィリピン系エスニック教会の若者集団である。娘たち4名は幼い頃から母親に連れられてフィリピン系エスニック教会に通っていたが、部活や勉強が忙しくなるにつれ、徐々に行かなくなっていった。そんな中、美波だけは定期的に教会に通い、教会に集うフィリピン系の若者たちとの交流を深めていた。教会では若者たちが楽器を使って演奏をするのだが、ピアノのできる美波はそこに自分の居場所を見出していったのである。しかし、そんな美波も高校に入ると、徐々に教会から足が遠のき、参加しなくなっていった。高校時代は夜遊びを繰り返し、母親と対立したこともあったという。「(一番親とぶつかったのは) 高校かな。夜、全然帰らなかったから」と話す。「別に自分も心配してんだなとか分かるけど、自分でさすがにそういう判別っ

ていうか、できるから……放っておいてほしかった」と彼女は語る。美波は学業成績が芳しくなく、高校は進路多様校^{*6}に進学したが、そこで出会った日本人の友人たちと夜遊びをしていた時期もあったというのだ。しかし、母親に連れられて教会のイベントに参加したことをきっかけに再び教会に通うようになり、現在では毎週かさず教会に通っている。

この教会に定期的に通っているのはフィリピン生まれの1.5世^{*7}や大人になってきてから日本にやってきたフィリピン人の若者たちである。かれらはフィリピン社会の性規範をより内面化しており、さらにキリスト教の規範も遵守している。こうした仲間集団に影響を受ける形で美波はキリスト教徒としての自覚を高め、キリスト教徒にふさわしい振る舞いをすることを意識するようになった。中学までは母親が行くから、ピアノを弾くのが楽しいから、という理由で通っていた教会だが、現在は「ちゃんとしたクリスチャン」になれたため、神様に祈りを捧げるために教会に行っていると述べる。キリスト教徒として節度ある振る舞いをするというのは、親の期待することとも合致しているため、現在では親との対立もほとんどない。

(3) 凜の事例

4名の中で最も親に反撥してきたのが凜である。彼女は高校卒業後、介護士として働いているが、週に2、3回は六本木のクラブに行き、朝帰りすることもある。「ノリがよければそれでオッケー。まじめはつままない」と言い、飲酒や喫煙もしている。フィリピン系の子が多く在籍する高校に通っていた彼女は、フィリピン系の友人たちと一緒にクラブで遊ぶことを楽しみとしている。凜のフィリピン系の友人たちの中には、日本生まれ日本育ちの者もいれば、学齢期途中で来日した子もいるというが、美波が準拠集団としている教会に集う若者とは異なり、性的にも奔放な子が多いようだ。彼女が準拠集団とするフィリピン系の仲間集団で共有されている性規範は、母親が求めるそれとは異なることがうかがえる。母親のことは好きだし、尊敬もしているというが、性を厳しく管理されることには強く反撥する。いくら注意されても言うことを聞かないため、最近では母親のほうが諦め気味であるという。

今はもうどうでもいいんじゃないかな。多分、ママ、何言っても凜、聞かないって思っちゃったし、ママにも言われたし。「六本木とか遊びに行かないでって言っても、凜、行くでしょ」みたいな。だから、もうママも諦めてる。

【凜／2018年3月21日インタビュー】

ただし、一方で交際相手ができたら紹介するという母親の言いつけを守り、彼氏を家族に会わせるといこともしている。『ママ、超怖いから』みたいな。『だからちゃんとして』って（彼氏に）言って、紹介したのだという。母親と彼氏と一緒にでかけることもしばしばあるようだ。親の期待する性規範からは逸脱しているように見える凜であるが、家族を大事にするという「家族中心主義」の規範はしっかり継承している。「その相手の家族も大事にしないと嫌だ。自分の家族を大事にできなかったら、他人の人も大事にできないじゃん。だから、自分の家族を大事にしてる人がいいかも」と彼女は話す。「家族中心主義」の規範を受け継いでいるため、母親による性の管理がいくら厳しく

でも親を完全に蔑ろにすることはない。

(4) 志穂の事例

凜の妹である志穂は、姉ほど頻繁に夜遊びをするわけではないが、姉の友人たちと一緒にクラブに遊びに行くこともある。1歳違いで非常に仲の良い姉妹である彼女たちは友人のような関係を築いており、凜の友達は志穂とも仲が良い。そのため、姉の仲間集団を部分的に準拠集団としている。ただし、志穂自身の高校の友人たちは学校に肯定的である者が多いという。彼女は姉のように飲酒や喫煙をしているわけでないのに、姉よりも母親からの干渉が強いことに不満をもらす。「お姉ちゃんとはほんとに（扱いが）違うもん。1歳しか違わないのに。（ママは）志穂のこと信じてないじゃん。……もう18歳なの」と母親のエイミーに向かって度々言う場面が見られた。エイミーと志穂は頻繁に2人で旅行に出かけるなどしており、非常に良好な親子関係を維持しているが、姉と比較して自分への性の管理が厳しいことに凜は強く反撥する。

親が子どもの心配をし、頻繁に電話をかけるのは他のフィリピン人もすることであり、それはフィリピン文化だと主張するエイミーに対して、小さい頃からフィリピン文化らしいものを教えられたことはないと言う志穂は、「フィリピン文化とか教えてくれなかったくせに」と今更フィリピン文化を持ち出すことに不満を抱いている。目上の人に対して行うフィリピン式の挨拶や簡単なタガログ語以外に継承しているフィリピン文化はなく、母親がなぜそれほどまでに自分たちの性を管理しようとするのか分からないと話す。フィリピン系の友人が多い姉に比べ、自分はフィリピン文化を継承できておらず、母からもっとフィリピン文化を教えてもらいたかったと彼女は語る。

以上見てきたように、どのような仲間集団を準拠集団とするかによって、またフィリピン文化をどの程度継承しているかによって、親の性の管理への対応の仕方が異なる。陽菜のように、向学校的な仲間集団を持ち、フィリピンへの頻繁な訪問を通してフィリピン文化を継承している場合には、親の性の管理に対して理解を示し、強く反撥することはない。一方、凜のようにどちらかといえば反学校的な仲間集団を準拠集団にしている場合は、親の性の管理に強く反撥する。ただし、凜の仲間集団はフィリピン系が多いため、凜はフィリピンで重視される規範を一定程度学んでおり、親に反撥しつつも交際相手を親に紹介するなど、親の言いつけを守っている側面を見せる。志穂はフィリピン文化をほとんど継承していないため、母親がなぜそれほどまでに厳しく性を管理するのか分からず、反撥を強めていた。姉と比較して母親の管理が厳しいのにも不満を示す。また、美波のように一時的に反学校的仲間集団を準拠集団としていたものの、その後教会の若者集団と交流を深めるなかで親の重視する性規範に自ら従うようになる場合もある。

ただし、準拠集団は一つではなく複数存在することにも留意する必要がある。娘たち4名は幼なじみとして幼少期から緊密な関係を維持しており、互いについて「何でも話せる」「この4人は特別」と話すが、この幼なじみ集団もまた彼女たちの準拠集団となる。友人関係にある親同士の子どもが友人である場合、世代間閉鎖性のあるネットワーク^{*8}が作られるといわれ（Coleman, 1988=2006）、世代間閉鎖性のあるネットワークにおいては、親は自分の子ども以外も監視することにな

り、規範を遵守させやすくなるという。母親同士が友人であり、かつ娘同士も友人である本論文の対象者たちは世代間閉鎖性のあるネットワークを築いているといえる。母親たちはこのネットワークを使って娘たちに性規範を遵守させようとする。特に早期妊娠については母親以外からも厳しい監視の目が向けられる。また、母親たちは娘たちを比較することによって、彼女たちに規範を守らせようとすることもある。例えば、エイミーとニコールは娘4名の中で一番真面目な陽菜を引き合いに出し、もっと真面目になるよう、娘たちに言い聞かせるといったことを頻繁に行う。それに対し、娘たちは「ハーフはみんな同じじゃない。陽菜と比べないで」(志穂)と言い、反撥する姿勢を見せるが、一方で母親の求める女性像を再認識し、自らの行動を捉え返すこともある。娘たちはこの幼なじみ集団があることによって、普段自分が関わっている仲間集団で共有される規範だけが全てではないことを確認することができる。

また、母娘の間にネットワークの他のメンバーが入ることで、母娘間の性の管理をめぐる緊張関係が緩和される場合もある。娘たちは、母親の友人に対しては、タガログ語で「おばさん」を意味する「ティタ (tita)」を用いて呼称する。例えば、陽菜以外の3名はケリーを「陽菜のママ」ではなく「ティタ・ケリー」と呼ぶ。「ティタ」というのは、フィリピンで親しい年上の女性に対して用いられる呼称である。娘たちは母親以外の第一世代を母親の友人、あるいは幼なじみの母親としてのみ捉えているのではなく、「ティタ」としても捉えており、独自の関係を築いている。そして、その「ティタ」が母娘間の緩衝材になることもある。特にケリーは、3名の母親のうち最も年齢が若いことから、凜、志穂、美波の母親に対する不満に対して理解を示したり、同時に母親の立場を説明することで母親への理解を促したりしている。

ケリー：アテ⁴⁹・エイミーは少し conservative (保守的) なの。

凜：じゃあ、凜もそうなったほうがいいの？

ケリー：でもね、本当はママになんでも言った方がいいの。

凜：何をいうの？

ケリー：ママ、今日彼氏とデートした。言って欲しいな。私なら。

凜：だって、ママどうでもいい反応しそう。

ケリー：そんなことないよ。

【2018年3月21日フィールドノーツ】

このように母親からの性の管理に対して反撥する凜をケリーが説得し、それに対して凜が今後の対応を再考するという場面も見られた。志穂は、ケリーについて「ママより話しやすい。ママに話せないことを話せる」と述べる。このように、ネットワークのメンバーが間に入ることで、親からの管理とそれに対する娘の反撥という図式だけに留まらない性の管理をめぐる柔軟な交渉が行われる可能性が示唆される。

6 まとめと考察

本稿では、日本に暮らすフィリピン系移民を対象に、第二世代女性の性の管理について母娘間でのような交渉が行われるのか、検討してきた。最後に本稿で明らかとなった知見をまとめ、考察を加えた上で今後の課題を提示したい。

第一に、母親たちが娘の性を管理する背景には、フィリピン社会での性規範、親戚やコミュニティにおける早期妊娠、在日フィリピン人女性に対するステレオタイプへの抵抗があることが分かった。特に重要なのが、日本社会に根付いているフィリピン人＝性的に奔放というイメージを払拭するため、またはそうしたイメージから娘たちを遠ざけるために娘たちの性を管理していたという点である。アメリカの先行研究では、第二世代の娘の性の管理は、エスニック集団の文化的優位性を示すために行われるとされてきたが、フィリピン人女性＝性的に奔放というステレオタイプが社会に根付いている日本においては、そのステレオタイプを払拭するということがまず必要であり、そのために娘の性の管理が行われていた。つまり、それは第一世代に付与されたスティグマが第二世代に継承されないための試みといえるだろう。

第二に、母親からの性の管理に対する娘の対応は、準拠集団となる仲間集団の違いやフィリピン文化の継承の度合いによって様々であったが、特にここで強調しておきたいのは、娘たちの対応に影響を与える準拠集団は複数存在するという点である。先行研究では、学業達成やアイデンティティ形成において準拠集団となる仲間集団が重要な影響を及ぼすことが指摘されてきたが、そこで言われる準拠集団は単一のものとして捉えられることが多かった。しかし、本稿で明らかにしたように、一方の仲間集団で共有される価値規範をもう一方の仲間集団が相対化することもあり、第二世代の準拠集団となる仲間集団を複合的に捉える視点を持つことの重要性が示唆される。

一方で、本稿で見たような母娘間の交渉が行われる背景には、良好な親子関係があることに留意する必要がある。今回対象となった娘たち4名は皆、自分がフィリピン系ハーフであることを肯定的に捉えており、母親に対しても愛情と尊敬の念を持っている。そのため、いくら厳しく性を管理されても、母親との関係を断絶するようなことはない。しかし、フィリピン系ハーフの中には、母親に対して強く反抗し、一時的に関係を断絶したというような者もいる(額賀, 2016)。そのような親子関係の場合には、性の管理をめぐる異なる様相が見いだされることだろう。

また、今回対象とした事例の場合、娘の性を厳しく管理するのは母親であり、父親たちが関与することはなかった。しかし、先行研究では、むしろ父親のほうが厳しく娘の性を管理する場合があることが指摘されている(Espiritu, 2003)。本稿では、日本人の父とフィリピン人の母からなる日比国際結婚家庭で育つ第二世代を対象としたがゆえに、出身国の性規範をもって娘たちの性を厳しく管理するのは母親に限定されていた。しかし、両親とも外国出身の場合には、父親が出身国の性規範のもと、性の管理を厳しく行う場合もあるだろうし、日本人の父親であっても、娘の性の管理に積極的に関わることもあり得る。この点については本稿の限界であり、父親が行う性の管理について事例を増やす中で改めて検討したい。また、親が求める性規範はエスニシティによって異なる

ことが想定されるため、性の管理をめぐる親子間の交渉のあり方の違いをエスニック集団間で比較検討することも必要だろう。さらに、息子に対する母親の性の管理について十分に検討できなかったことも本稿の限界として挙げられる。娘たちは他の男きょうだいよりも自分たちのほうが厳しく性の管理が行われていると主張するが、この点については、息子たちに対してインタビューを行い、より詳細に検討する必要があるだろう。これらの点については今後の課題としたい。

- *1 「拡大家族成員のつながりを重視し、個人よりも家族の利益を優先する価値観」（額賀，2016：90）を家族中心主義という。家族中心主義を内面化した若者の場合、個人の社会的成功や学業達成よりも家族のケアを重視し、フィリピンの家族に送金するために早期に学業から離脱し、就労することもあるという（額賀，2016）。
- *2 2015 年から国家戦略特別区域において外国人家事労働者の受け入れが始まったが、対象者たちが来日した時期には日本人が雇用する外国人の家事労働者は認められていなかった。ただし、例外として在日外国人が身元保証人となった場合には、特定活動ビザで来日し、家事労働者として働くことができた。エイミーとケリーは日本に居住するホワイトカラー外国人に雇われて日本に来ている。
- *3 ここでは信徒の多くがある特定のエスニシティで占められている教会のことをエスニック教会と呼ぶことにする（星野，2012；三浦，2015）。
- *4 2018 年 3 月 9 日～14 日フィールドノーツ。
- *5 例えば、教会内で若者同士が交際し、短期間で別れてしまった場合には、大人たちから厳しい目が注がれるという（2010 年 12 月 26 日インタビュー）。この事例はキリスト教の教えに反することではないが、性に関わることについて教会内で監視の目が注がれることを示している。
- *6 進路多様校とは、普通科の高校階層の中位から下位に位置する高校であり、卒業後の進路が進学、就職、無業と分化している高校のことである（荻谷ほか，1997）。
- *7 ルンバウトは、移民時における年齢と親の出身地によって、言語適応、アイデンティティ形成やホスト社会への適応の仕方が異なってくるとし、移民世代を 4 つに分類した（Rumbaut，2002：49）。その 4 分類とは、1.0 世（移民時 18 歳以上）、1.5 世（移民時 18 歳未満）、2.0 世（ホスト国生まれ、親の出身地が外国）、2.5 世（ホスト国生まれ、片方の親の出身地が外国）である。本稿では学齢期途中で来日した者たちを 1.5 世として扱う。
- *8 例えば、二組の親子の親同士、子ども同士が友人関係にある場合、親子間だけでなく親同士、子同士の間にも関係性があるため、この四者によって構成されるネットワークは閉鎖的な社会構造になる。このネットワークにおいて、親同士は子どもの行動について話し合い、行動の基準や制裁について共通理解をとることができる。さらに、相互監視が促されるため、子どもにも規範を遵守させやすい。反対に、子ども同士だけが友人であり、親同士に関係性がない場合には、ネットワークは開放的な社会構造になり、相互監視ができず、規範を遵守させることが難しい（Coleman，1988=2006：220-221）。
- *9 「アテ（ate）」はタガログ語で「お姉さん」の意味。「ティタ」と同様に血縁関係にある姉だけでなく、年齢の近い年上の女性に対して用いる。

《参考文献》

- ・伊藤るり，1992 『『ジャパゆきさん』現象再考——80 年代日本へのアジア女性流入』伊豫谷登士翁・梶田孝道編『外国人労働者論』弘文堂，293～332 頁。
- ・笠間千浪，2002 『ジェンダーからみた移民マイノリティの現在——ニューカマー外国人女性のカテゴリー化と象徴的支配』宮島 喬・梶田孝道編『国際社会〈4〉マイノリティと社会構造』東京大学出版会，121～148 頁。
- ・荻谷剛彦・粒来香・長須正明・稲田雅也，1997 『進路未決定の構造——高卒進路未決定者の析出メカニズムに関する実証的研究』『東京大学大学院教育学研究科紀要』37 巻，東京大学大学院教育学研究科，45～76 頁。
- ・児島 明，2008 『在日ブラジル人の若者の進路選択過程——学校からの離脱／就労への水路づけ』『和光大学現代人間学部紀要』1 号，和光大学現代人間学部，55～72 頁。

- 佐久間孝正, 2006『外国人の子どもの不就学——異文化に開かれた教育とは』勁草書房
- 志水宏吉・清水睦美編, 2001『ニューカマーと教育——学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店
- ダアノイ, メアリー・アンジェリン, 2017「多元的主体としてのフィリピン・ジャパニーズにおけるアイデンティの具体化」佐竹眞明・金愛慶編著『国際結婚と多文化共生——多文化家族の支援にむけて』明石書店, 143～166 頁
- 高谷 幸編著, 2019『移民政策とは何か——日本の現実から考える』人文書院
- 坪田光平, 2018「中国系ニューカマー二世世代女性の学業達成過程——親子関係と文化継承に注目して」『日中社会学研究』26 号, 日中社会学会, 22～35 頁
- 津田友理香, 2017「日比青年教育プログラム (JFYEP) とフィリピン系成人女性による『ゆるやかなつながり』の試み」佐竹眞明・金愛慶編著『国際結婚と多文化共生——多文化家族の支援にむけて』明石書店, 167～200 頁
- 額賀美紗子, 2013『越境する日本人家族と教育「グローバル型能力」育成の葛藤』勁草書房
- 額賀美紗子, 2016「フィリピン系ニューカマー二世世代の親子関係と地位達成に関する一考察——エスニシティとジェンダーの交錯に注目して」『和光大学現代人間学部紀要』9 号, 和光大学現代人間学部, 85～103 頁
- 藤浪 海, 2017「ブラジル系移民コミュニティと二世世代男性の進路選択——横浜市鶴見区の学習教室の事例から」『移民政策研究』9 号, 明石書店, 58～73 頁
- 星野 壮, 2012「日系ブラジル人教会と信徒の今後——言語と信仰の継承をめぐる」三木 英・櫻井義秀編『日本に生きる移民たちの宗教生活——ニューカマーのもたらす宗教多元化』ミネルヴァ書房, 87～114 頁
- 三浦綾希子, 2015『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ——二世世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房
- 宮島 喬・太田晴雄編著, 2005『外国人の子どもと日本の教育——不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会
- 矢元貴美, 2016「フィリピンにルーツを持つ子どもの大学・短期大学への進学理由——日本で高等学校を卒業した人たちの事例から」『移民政策研究』8 号, 明石書店, 89～106 頁
- Ballescas, M. R. P., 1992, *Filipino Entertainers in Japan: An Introduction*, Quezon City: The Foundation for Nationalist Studies, Inc. (=1994, 津田 守監訳『フィリピン女性エンターテイナーの世界』明石書店)
- Coleman, J. S., 1988, Social Capital in the Creation of Human Capital, *American Journal of Sociology* 94, pp.S95-S120. (=2006, 金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編・監訳『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房, 205～241 頁)
- Das Gupta, M., 1997, What is Indian about you? A Gender Transnational Approach to Ethnicity, *Gender and Society* 11(5), pp.572-596.
- Espiritu, Y. L., 2003, *Home Bound: Filipino American Lives Across Cultures, Communities, and Countries*, University of California Press.
- Guarnizo, L. E., 1997, The Emergence of a Transnational Social Formation and the Mirage of Return Migration among Dominican Transmigrants, *Identities* 4(2), pp.281-322.
- Rumbaut, R. G., 2002, Severed or Sustained Attachments? Language, Identity, and Imagined Communities in the Post-Immigrant Generation. in Levitt, P. and Waters, M. C. (ed.), *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, Russell Sage Foundation, pp.43-95.
- Sheba, M. G., 2005, *When Women Come First: Gender and Class in Transnational Migration*, University of California Press. (=2011, 伊藤るり監訳『女が先に移り住むとき——在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界』有信堂高文社)
- Toro-Morn, M. I. and Alicea, M., 2003, Gender Geographies of Home: Mapping Second- and Third-Generation Puerto Rican's Sense of Home, in Hondagneu-Sotelo, P. (ed.), *Gender and U.S Immigration: Contemporary Trends*, University of California Press, pp.194-214.
- Wolf, D. L., 2002, There's No Place Like "Home": Emotional Transnationalism and the Struggles of Second-Generation Filipinos, in Levitt, P. and Waters, M. C. (ed.), *The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, Russell Sage Foundation, pp. 255-294.
- Zhou, M. and Bankston III, C. L., 1998, *Growing Up American: How Vietnamese Children Adapt to*

American Life in the United States, Russell Sage Foundation.

- Zhou, M. and Bankston III, C. L., 2016, *The Rise of The New Second Generation*, Polity Press.

Negotiation Between Mothers and Daughters Over Control of the Second Generation's Sexuality:

A Case Study of Filipino Immigrants in Japan

MIURA Akiko *Chukyo University*

Key Words: control of sexuality, reference group, network

This study describes negotiation between mothers and daughters over control of the second generation's sexuality, through a case study of Filipino immigrants in Japan. Filipino mothers try to strictly control their daughters' sexuality by making frequent phone calls to check their whereabouts, checking their clothes, and restricting their daughters' behavior. There are three reasons why they do this. First, mothers refer to the strict sexual norms of the Philippines, a Catholic nation. Second, mothers want to avoid teenage pregnancy, which is thought of negatively in the Filipino ethnic community and among the mothers' relatives. Third, mothers are worried that their daughters may be viewed as sexually unrestrained Filipino entertainers, a stereotype that is deeply rooted in Japanese society.

The daughters clashed and negotiated with their mothers. The daughters' patterns of reaction differed depending on their reference group and degree of familiarity with Filipino culture. Those who had a more obedient peer group and were familiar with Filipino culture understood the purpose of their mothers' attempts to control their sexuality. In contrast, those young women whose peer groups enjoy night life tended to resist the control. However, each individual is influenced by multiple reference groups. The daughters interviewed in this study have been friends from childhood, and this peer group also influenced their reactions to their mothers' control. In addition, the intergenerational closed network established between mothers and daughters encouraged daughters to observe sexual norms. Mothers kept their eyes not only on their own daughter(s) but also on their friends' daughters, and they sometimes stepped in to mediate when there were tensions between mother and daughter.